

## 紙 碑

## 黒田長久博士を悼む

森岡弘之

本会名誉会員で元会頭（当時は会長ではなく会頭であった）の黒田長久博士は、本年（2009年）2月26日、突然他界された。最近ご病気がちの話は何っていたが、元来頑健な方なので、まだまだ大丈夫と安心していただけであった。こんなことになるのならもっと早くに電話でも差し上げておけばよかったのに、と悔やまれる。最後にお目にかかったのは、2004年11月21日に開かれた博士の米寿祝賀会の席上であった。

博士は1916年11月23日の生まれで、享年92歳。長寿であったといえよう。博士と私の縁は、1948年（黒田長礼博士追悼号にある1953年は誤り）、私が日本鳥学会に入会した時に始まる。渋谷にあった山階鳥類研究所で初めてお目にかかった。私はまだ高校生であったが、鳥類の分類や形態に興味を持ち、標本も集めていた。爾来60年にわたって親しくさせて頂いた。

1960年代までは鳥学会の例会が山階鳥類研究所で毎月開かれていて、その席には戦前から名のある方が顔をそろえていられた。また、当時学会の庶務・会計幹事であった黒田博士と高島春雄氏の推薦で、日本鳥類目録4版（1958）の編集委員会や鳥学会の創立50周年記念展示会（1962）に私も参加させて頂いた。それらのことのおかげで、鷹司、黒田（長礼）、内田、山階、蜂須賀、清棲などの諸博士や初山（徳太郎）氏など著名な鳥類学者と顔見知りになれたのである。1989年に亡くなられた山階博士を除いて、戦前の日本の鳥類学者と直接面談した経験のある会員は今では希少であろう。

これらの碩学のなかでも、黒田長礼博士は謹厳無比でしかも寡黙な方であったので、近寄り難い存在に思われたが、本当はそうではなかった。質問すれば丁寧に応接して下さった。黒田長久博士は長礼博士のご長男で、謹厳・厳格・公正・寡黙・筆まめなどの長礼博士の資質を間違いなく受け継いでおられたが、一世代若いだけに気安く接することができた半面、頑固な面もあった。例えば、心臓疾患のあったご長男の世話をするために、山階鳥類研究所の職も鳥学会の会頭も研究活動もやめてしまわれたのであった。ご子息のためとはいえ、余人にはできぬことである。黒田家の財力

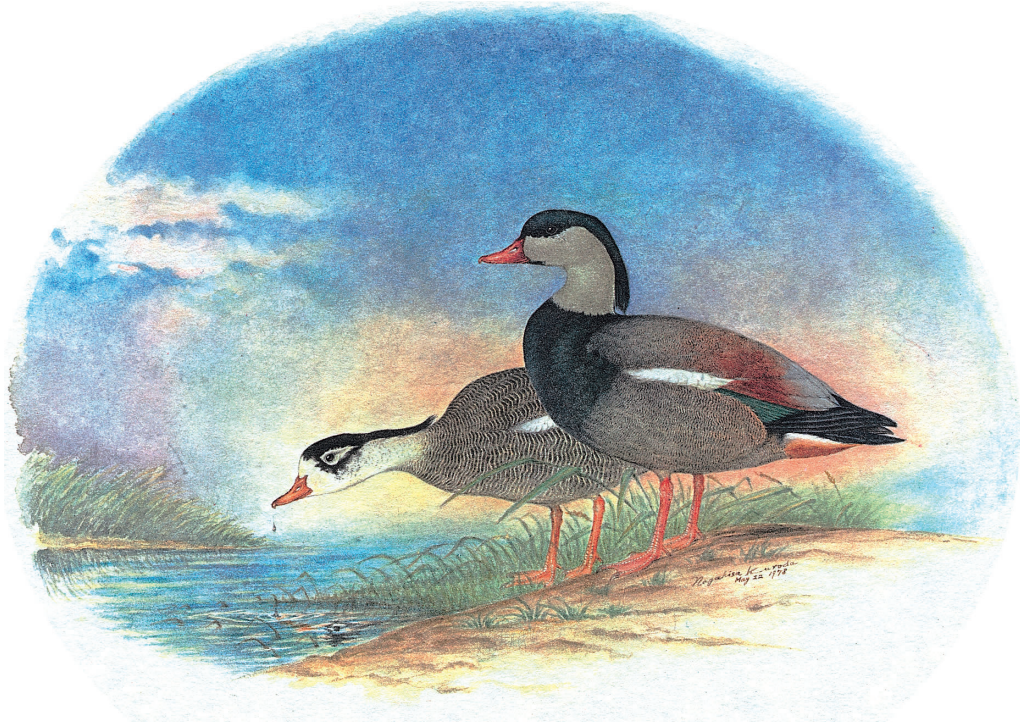


黒田長久博士

があれば、他人にまかせることもできたであろう。その後このご子息は亡くなり、博士は研究に復帰された。黒田長久会頭の期間の間に古賀忠道会頭の時代が挟まっているのは、こうした事情によるのである。

さて、黒田長礼博士はいうまでもなくわが鳥学会の創立者のひとりで、日本の代表的な鳥類学者であり、親子2代にわたって鳥類学者、しかも2人とも一国の代表的鳥類学者という例は、絶無ではないにせよ希有であろう。

黒田長久博士の論文・著作目録は「鳥」26巻2/3号に、長礼博士のそれは「鳥」12巻59号に出ている。お二人とも日本の鳥類学者のなかではずば抜けて研究業績が多いが（これらの目録出版後に発表されたものも少なくないので、実数はもっと多い）、父子は互角であろう。しかし、長礼博士は「六郷川口に於ける鶺鴒・千鳥類の渡り」（1919）のような著作もあるが、分類と分布が専門で、研究範囲は哺乳類から魚類まで脊椎動物全般にわたっていた。いっぽう、長久博士は鳥類が専門で（動物系統分類学の哺乳類は執筆されている）、研究範囲は分類・形態学から分布、生理、生態、行動、飛翔、渡り、保護など鳥類学のほとんど全分野に及んでいる。そして特筆すべきことは、お二



人ともほとんど単独で研究され、共著はごく少ない、まして他人の論文に共著者として名前だけ入れてもらうようなことはまったくされなかった。なお、両博士の略歴は上記の業績目録を参照して頂きたい。

長久博士の学位論文はミズナギドリ類の骨格に関するもので（1954、英文）、機能形態学的観点からまとめられている。今日では、少なくとも現生種の骨格や筋肉の単なる記載は論文として価値がないが、当時は緻密な記載が科学的であり、機能形態学は素人仕事と思われていた。しかし、骨格は筋肉と協同して初めて機能する（働く）ものであり、それによって適応的・進化的価値が生ずる。それから生態学的研究、特にムクドリとカラスの生態研究はいかにも長久博士流の仕事だが、将来もっと評価されるであろう。中山書店の「動物系統分類学」鳥類（1962）と哺乳類（1963）は未だに日本語では類書がなく、教科書として有用である。

黒田父子の日本鳥類学への貢献は多数の研究業績だけではない。長礼博士の追悼号（鳥 27 巻 4 号）でも述べたように、日本鳥学会を創立し、かつ戦前から戦後の困難な時期にこれを維持して下さったことが大きい。いうまでもなく、一国の科学の発展に学会の存在は不可欠である。もちろん、黒田父子だけで鳥学会が維持できたわけではないが、私が引き継いだ頃までの学会は文字どおり万

年赤字であった。黒田父子が人知れず支えてくださらなければ学会は消滅したと思う。私の代になってやっと黒字に変わり、ささやかながら基金もできたが、それでも一時は黒田家から図書や別刷を預り、それらを売って半額を学会が頂戴していたのである。黒字体質に変わったのは私の功績ではない。その頃から日本経済が高度成長に入ったためである。しかしまた、高度成長は国土の甚大な環境破壊ももたらした。

さて、予定の紙面は尽きてしまったが、黒田父子のあまり知られざる人となりや趣味について書き残しておきたい。

長礼博士は私にとって寡黙な方で、学会などでも前列中央に一人黙然と座っていられた姿が目につく。しかし、お若い頃は講演を好まれ、また宴会で黒田節を唸われたこともあったという。お酒が強かったので、案外宴席がお好きだったのかもしれない。それから趣味のひとつはチェロを弾くことだったが、その時は自室に閉じこもり、ぴたりと障子を閉じて、長久博士にさえ覗かせなかったそうである（長久博士の談による）。私には長礼博士とチェロの組み合わせはどれも似つかわしくない。

長久博士は趣味が多かったと思う。まず絵をよくされた。博士の絵は中間色を主体に全体に霞をかけたような按配で、輪郭も弱く、ご自身は「生態画」のお積りであったが、実写的であるより詩

的な趣きがあった。画題も「夕陽を背景に乱れ飛ぶガンの群」のようなものがお好みであった。毎年ご自身の絵の年賀状やカレンダーを頂戴したが、今、手許にあるのはカンムリツクシガモの1枚だけである（前頁図）。この絵は珍しく鳥体が主題で、命名者の長礼博士の追憶のために描かれたといわれ、1978年頃の作品である。原画は確か画用紙ではなく皿に描かれた筈で、その皿はまだ黒田家にあるであろうから、同家で未永く保存して頂きたいものである。それから語学にも格別の興味があり、英・独・仏・西はもちろん、伊や露語の論文も辞書を片手に読んでいられた。

長い間のお付き合いなので書きたいことは多々あるが、最後にもうひとつ取っておきのエピソード

を披露してこの稿を終る。それは冒頭に記した米寿（88歳）祝賀会の時のことである。会の終りに長久博士が起って謝辞を述べられ、それからご自身で作詞・作曲した「ムクドリの歌」を歌われた。出席者一同は啞然とし、終ると拍手大喝采であった。この時私の頭をよぎったのは、79歳のトスカニーニが「椿姫」のリハーサルをつけながら歌手たちの手本に歌った歌声である。その声は囁かれていて音域も狭かったが、独特の味わいがあった面白かった（これはNHKの「素顔の音楽家」の録音で、時々聴いているが、実に面白い）。長久博士の歌もそのトスカニーニに負けず劣らず面白かった。残念だが、私たちはもう二度とムクドリの歌を聴けぬ。心からご冥福を祈ります。